様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２３年　５月１１日現在

機関番号：13901
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2008～2011
課題番号：20520221
研究課題名（和文）
ヴィクトリア朝文学に見られるイジメの社会的および心理的文脈の研究
研究課題名（英文）
A Study of the Social and Psychological Contexts of Bullying in Victorian Literature
研究代表者
松岡　光治（MATSUOKA, Mitsuharu）
名古屋大学・国際言語文化研究科・教授
研究者番号：70181708

研究分野：十九世紀イギリス文学
科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学
キーワード：イジメ，暴力，自殺イジメ，ヴィクトリア朝，社会的文脈，心理的文脈，イギリス小説，ディケンズ，ギャスケル，ギッシングヴィクトリア朝 ，社会的文脈，心理的文脈，イギリス小説，ディケンズ，ギャスケル，ギッシング

１．研究計画の概要

現代社会における「イジメ」という現象は、戦後の日本が先進諸国に追いつけ追い越せの競争原理で猪突猛進し、常軌を逸した結果として生まれた弊害に他ならない。戦後の急速な工業化と都市化を経てからバブル景気を通して平成の大不況に突入した日本人は、産業革命後の鉄道・汽船による交通革命を経て「世界の工場」として経済と金融をグローバルに牛耳った大好況期のあとで、独米の工業化によって大不況に陥ったヴィクトリア朝の人々と同じ社会問題を幾つも抱えている。イジメをそうした社会問題から派生した複雑な心理的副産物として捉えるならば、ヴィクトリア朝の時代精神と社会風潮という文脈の中でイジメの原因と温床構造を分析することによって、現代の日本社会におけるイジメ問題を解明するための糸口となるような示唆的で意義のある結果を導き出せるに違いないし、その分析結果はイジメ対策への大きな貢献となるはずである。

本研究は、ヴィクトリア朝の文学テクスト（主にディケンズ、ギャスケル、ギッシングの小説）を一次資料とし、そこで明示的／暗示的に描写されたイジメの場面に焦点を定め、19 世紀イギリスの時代精神と社会風潮の影響を受けた人間のイジメという言動の法則性を突き止め、そうしたイジメの言説を表出させている社会的および心理的文脈を解明するものである。具体的には、ヴィクトリア朝文学に見られるイジメの問題を照射し、「イジメは産業革命後の時代精神と社会風潮が人間およびその集団に強いる抑圧の結果として生じた現象である」という仮説を立て、階級、人種、ジェンダー、産業、地域、環境、世代、教育、言語、情報など、権力が偏りやすい非合理的な社会構造を理論的アプローチと実証的アプローチの両面から分析することによって、この仮説を実証する。

２．研究の進捗状況

(a) 独自に開発してウェブ上に公開したハイパー・コンコーダンス（http://victorian.lang.nagoya-u.ac.jp/concordance/）のデータベースを充実させるべく、ヴィクトリア朝文学テクストの電子化に努め、同時にウェブ上のパブリック・ドメインにあるヴィクトリア朝関係の電子テクストを（マイナーな作品も含めて）収集してデータとして利用した。

(b) ヴィクトリア朝作家 100 人の電子テクストを使って、イジメの言説をサブ・データベース化し、その KWIC コンコーダンスの「文

脈」の精査に基づいて分類し、社会的および心理的文脈との関連性を検討した。
(c) ヴィクトリア朝の主要ジャーナルのイジメ関連記事、ヴィクトリア朝の政治、経済、医療関連の文献、およびイジメに関する最新の論文を通して、イジメの構造に関わる通念を再検討した。

３．現在までの達成度
②おおむね順調に進展している。
（理由）
　初年度と次年度は、ディケンズ、ギャスケル、ギッシングの作品に見られるイジメの言説と歴史的、政治的、経済的、医学的文脈との関連性を分析し、これらの研究を踏まえて、3 年目の本年度は特にイジメから自殺に至る、その過程の仕組みを社会的および心理的文脈を通して解明している。
　特にギャスケルに関しては、産業革命後の自由放任主義という楽観主義的なイデオロギーが生み出す社会問題（主として、現代に通じる二極化した格差社会における階級的なイジメの問題）について詳しく分析でき、それが編著書『ギャスケルで読むヴィクトリア朝前半の社会と文化』として結実した。

４．今後の研究の推進方策
平成 23 年度（最終年度）はディケンズ・フェロウシップ日本支部の秋季総会において「ディケンズと暴力」というシンポジム（他のパネリストは玉井史絵、矢次綾、閑田朋子）を主宰し、〈暴力〉、〈イジメ〉、〈自殺〉をキーワードとした研究発表を行う予定である。

５．　代表的な研究成果
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）
①松岡光治、「ダイナ・マロック「窓をたたく不思議な音」」、『言語文化論集』（名古屋大学大学院国際言語文化研究科）、査読無、32 巻 1 号、2010 年、19-34 頁.
②松岡光治、「ウィルキー・コリンズ「ジェロメット嬢と牧師」」、『言語文化論集』（名古屋大学大学院国際言語文化研究科）、査読無、31 巻 2 号、2010 年、1-25 頁.
③松岡光治、「アミーリア・エドワーズ「鉄道員の復讐」」、『言語文化論集』（名古屋大学大学院国際言語文化研究科）、査読無、31 巻 1 号、2009 年、1-21 頁.

〔図書〕（計 3 件）
①松岡光治（編著）、『ギャスケルで読むヴィクトリア朝前半の社会と文化――生誕二百年記念』、溪水社、査読有、2010 年、720 頁.
②松岡光治（共著）、「リアリズム再考――ギャスケルはオースティンの娘か？」、『生誕 200 年記念――エリザベス・ギャスケルとイギリス文学の伝統』、大阪教育図書、査読無、2010 年、11-21 頁.
③松岡光治（共訳）、『涯（はて）』、「百年文庫」シリーズ第 22 巻、ポプラ社、査読有、2010 年、6-44 頁.